

第1節 第2項 ドイツ・ローマン派と近現代：ゲーテの翻訳論からベンヤミンの純粹言語へ

しかし、「近代」の翻訳論が、全てそのような状態にあったのではない。ポスト・モダンな翻訳論が夢想するように、近代が一枚岩・均質で、暗黒の時代であったわけでは、もちろんなく、翻訳という過程の核心にメタ語用を据える思想は、しばしば、近代の翻訳論のプロトタイプとして位置づけられるドイツ・ローマン派のそれに刻印されている。

ある意味において、近現代の翻訳論は、その起源を裏切ること、忘却することにより形成されてきたものであったと回顧できるだろう。言い換えれば、ハイデガー、特にデリダなどに見られるように、近代の翻訳論、あるいは翻訳の近代を「乗り越える」試み、「破壊／脱構築する」試みは、その起源であるローマン派の思想、その（不）可能性の中心を執拗に問い合わせることによってのみ可能となる（かのように近代においては構成されている³。）

したがって、近代の翻訳論は、少なくとも、上記のようなテクスト論だけではなく、以下のような、ドイツ・ローマン派の翻訳論によっても特徴づけられるものである。すなわち、アントワーヌ・ベルマン（2008[1984]: 261-262）が指摘するように、ドイツ・ローマン派の翻訳論では、言語と、その言語をとおして書かれた作品（テクスト）との違いが認識され、作品（解釈体としてのテクスト）が批判・批評、および翻訳——つまりメタ語用——を呼び込む、とされている。言い換えれば、普遍性=象徴性への運動を開始させる作品、すなわち、翻訳を呼び込む作品こそが、「原型的」（多言語的、且つ普遍的）であると見なされているのである。こうして、ドイツ・ローマン派は、ナショナリズムの傾向を強く示しつつも、同時に脱ナショナリズム=普遍への志向性も色濃く持ち、そしてテクスト／メタ・テクスト論——翻訳・批評——が、そのような普遍主義の中核に位置づけられているのである⁴。

こうしたドイツ・ローマン派に見られるナショナリズムと結託した（あるいは、せめぎ合う）普遍主義的志向性（の萌芽）を最も良く表しているものの1つが、ゲーテの「世界文学論⁵」、そして「翻訳論」であろう。後者、ゲーテの説く翻訳・翻訳者の段階論（1819年出版の『西東詩集』（*West-Ostlicher Divan*）

所収⁶) を、本書の文脈に沿って、一定程度「翻案」して述べるとすれば、概略、以下のようになる⁷。

まず、(1) 第一の段階では意訳的な、目標言語の使用者にとって分かりやすい翻訳により、起点言語文化を、たとえそれが目標言語文化の枠組みによる理解であっても、まずは知ることがなされる。(たとえば、ルター訳の聖書や、技術的な情報を得るための翻訳などがこれに当たる。)

(2) 続く第二の段階では、第一の段階での上記のような操作が、原文（起点テキスト）やその言語、社会文化（いわば、異国の他者）に対して、後者自身の枠組みを尊重しないという一種の暴力性を帶びたものであることが理解されるため、異国の他者の置かれている状況へと身を掛けこうとして、より直訳的な翻訳が行われる。

(3) 最後の、そして三者の中で最高の水準にあるとされる第三の段階では、第二段階での試みが、実際には、異国の他者の持つ考えを自らのものとして取り入れ、表象（代表）した——他者に代わって表した——ものにすぎないこと（結局は「異国風」、あるいは「パロディー／擬態」の範疇を出ないこと）に気づき、翻訳者は、異国の他者の「代わりに」ではなく、異国の他者のいる場に立つ——自国語において他者と存在論的に同一化する（いわば、自国語において、自国語にとっての他者になる⁸；その意味において、異国の他者でも自国の自己でもない、異化効果を持つ「第三者」となる）——ことが目指される⁹（Levy, 2006: 17-20）。

ゲーテ自身は、この第三段階の事例としてフォス (Johann Heinrich Voß, 1751～1826年) による翻訳を挙げており¹⁰、他方、Levy (2006: 20) などは、批判的なポスト・コロニアル翻訳研究者である Liu (1995) などが論じる「間言語的実践」と、このゲーテの翻訳の第三段階／第三者との結びつきを示唆したりしている¹¹。

この最後の、第三の段階の翻訳は、Inoue (2012: 119) が明晰に指摘するとおり、もはや原典の代理（表象）ではなく、原典と同じ地平=水準にあるものとなる。原典に対する翻訳の優越性を説くベンヤミンは、このゲーテの動き、すなわち、原典の持つ本来性を欠いた擬似的コピー（表象）としての翻訳から、原典と同じ存在論的特質を持つものとしての翻訳へ、という動きを踏まえ、そ

れをさらに展開させようとしたものといえる。また、Copeland (1991: 27) が示唆するように、キケロに代表される古代ローマの修辞学の伝統では、このような翻訳による原典の乗り越え、あるいは、翻訳する言語文化（ラテン語圏ローマ）による原典（ギリシア語圏）の乗り越えという発想は広く見られ、たとえば小セネカ（紀元前1年頃～紀元後65年）なども、『ルキリウスへの手紙：モラル通信』所収の第84書簡（8～9節）で模倣（*mimesis*）について論じる中で、真の模倣者は、絵がそのモデルを真似るようにではなく、子が父親に似るように、モデルに自らの特徴を上乗せし両者に一個の統合をもたらすと述べている。そこに見られるように、キケロ的な古代ローマの伝統における翻訳は、まさしくそのような（擬似的コピーではない）模倣として捉えられていたのであり、ゲーテの翻訳論はローマの修辞的翻訳論の近代的な再生であるとも特徴づけられることに注意を喚起したい¹²。（古代ギリシア・ローマの後継者、特にギリシア語からのドイツ語への翻訳によって示されるギリシアの正当なる後継者としてのドイツというテーマが、フランスとの競合関係にあったドイツのローマン主義者の間に看取されることは本書1章で示唆したとおりである。）

さらに、次の3つの論点も指摘しておくに値しよう。(1) 他者と完全に同一化する——他者に成る——という理念（あるいは翻訳者の使命）は、自らのうちに他者を見い出す=もたらす、というモダニストの理念と類似性を持つこと¹³、そして、(2) 逐語的な翻訳が示すような、原典=他者との同一化への志向性は、ほぼ必然的に自己とその言語文化に変容（創出的指標性）をもたらすということ、最後に、(3) もし他者との完全な同一化は、翻訳者（つまり、人や、その他のこの世のものたち）が使命として抱く理念・目的としてはありえても、あるいは、此岸と彼岸の境界の滅却という神秘主義的な体験の中ではありうるとしても、実際には、つまり此岸の世界では、成しえないものであるならば、この理念の現実化は、此岸のものではなく、此岸を越えた神（神的なもの）による啓示、奇跡、救済によってのみ、醜く汚れ腐ったこの地に——われわれのこの世界に——顕現するものである。すなわち、ベンヤミンが説くような逐語的な翻訳が示す志向性は、自己と他者との、自言語と他言語との、完全な同一化への志向性、究極的には、いかなる言語の違いも越えた純粋な普遍言語（*unio mystica*）への志向性、つまりは、この世ではありえない神のことばへ

の志向性なのであり、この普遍的な神のことばの、奇跡的で偶発的、逆説的で革命的な、この世での顕現によって、この世界で今、現実化されている歴史の流れが反転し、その歴史が生み出してきた瓦礫、持たざるものたち／ホモ・サケル、忘れられた歴史たち、その中から、記憶の天使が浮かび上がり、これまでこの世で非現実化されてきた真理が、今ここで直示されること、直截に示されることを求める隱然たる祈り、あるいは遂行文のごとき呪文／マントラであるともいえるのではなかろうか。

(加えて、「翻訳者の使命」に示されたベンヤミンの翻訳論との近似を示すローゼンツヴァイク (1886～1929年) の翻訳観、および聖書翻訳実践については Reichert (1996: 174-176, 183-185) に詳しい。特に、そのような近似性にもかかわらず、ブーバー／ローゼンツヴァイクによるヘブライ語聖書の独語訳に関してベンヤミンは、この独語訳に対して辛辣な書評を書いたクラカウアー (1889～1966年) や、ベンヤミンの盟友ショーレム (1897～1982年) に宛てて、彼らの批判的な評価に同意する旨を私信で伝えていたことに留意したい。実際、ベンヤミンは、現代においては、聖書のことば=神的使信を現世の読み手=聞き手にもたらすには余りにも——SILやナイダなどの能天気な信念に反して——両者の間の断絶は深く、名と物との一致したエデン的な、神的な状況へと、ヘブライ語の原典のブーバー／ローゼンツヴァイク的な逐語的独語訳によっては回帰できるわけがないと捉えていた。だが、その一方で、ベンヤミンは、このヘブライ語聖書の独語訳に見られるのに類似した言語的、実存神学的傾向を示していると思われるローゼンツヴァイクの『救済の星』 (*Der Stern der Erlösung*, 1921) については高く評価するなど、ローゼンツヴァイクの思想や仕事については両義的な態度を示していた。また、ショーレムも、1961年に至ってようやく翻訳が完了を見た後には、ブーバー (1878～1965年) に対して、このヘブライ語聖書独語訳で試みられた強度の逐語訳に注釈を嵌め込むという嘗為は高く評価できる旨を書き送っている。そして、一般に、ブーバー／ローゼンツヴァイクのヘブライ語聖書独語訳を批判したのは、西欧マルクス主義・フランクフルト学派として後日、知られるようになるものに近い思想を抱いていた、異教徒に同化したユダヤ（アシュケナージム）系知識人であった。彼らは、ローゼンツヴァイクやその師であったマールブルク学派新カント主義者のヘルマ